

〔注意〕

※ 解答はすべて解答用紙に記入すること。

※ 特にことわった場合をのぞいて、解答の字数指定では「、」や「。」その他記号も一字に数えます。

一

次の――線のカタカナは漢字に直して書き、漢字はその読みをひらがなで書け。きなさい

(1) 平安時代のキゾクの文化を知る。

(2) 小学校のジドウを中学校に招待する。

(3) リモコンのデンチを交換する。

(4) 列車がキテキを鳴らす。

(5) 思い出が走馬灯のように浮かぶ。

(6) 幽玄おしむきな趣のある作品だ。

(7) あまりの恐ろしさに生きた心地がなかった。

(8) 読書中に睡魔おそに襲われる。

↑ 中学校配当の字にしてください。

(5) 2 (18) 易しいので難度を上げてください。

(6) は言葉としては知らないかもしれませんが、他に読みようがないので簡単に答えらるると思われれます。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ミカズは中学三年生のときにガラス製品に興味を持ち、大学生になって本場のイタリアに旅行した。その後、大学で佐藤さんという女性、訪れた沖縄で由太郎さんというガラス職人に会った。

ミカズはさらに、いつか自分の*₁工房をかまえて、ガラス作りをしたいと言った。

「趣味じゃなく、それを*₂生業にしたい。ただし、いまのぼくじゃあ、とても無理だというのもわかっている。いろいろな場所に行つて、いろんなひとにあつて、もっと自分を鍛えないと、存在感のあるものは作れない」

「また話を聞かせてください。でも、三年生になったら、おたがい、いま以上に忙しくなつてしまふんでしょね」

残念ながら佐藤さんの予想は当たり、ふたりはそれきりゆくり話す機会を持てないまま、卒業の日を迎えた。しかも式場に佐藤さんの姿はなかった。

土木工学科の学生に聞くと、佐藤順子さんは祖父の容体が急変したため、埼玉県の実家に帰っている。自分たちも佐藤さんと一緒に卒業したかったので、残念でならないという。

十一月のはじめに、工学部の*₃ローンでA鉢合わせしたとき、ミカズは大手企業に就職することを伝えた。表参道に独身寮があり、そこに入ると言うと言うと、佐藤さんは埼玉県の教員採用試験に合格したという。もっと話したかったが、こちらも急いでいたし、むこうも時間がないようだった。

①まさか、それが*₄北大のキャンパスで会う最後になるとは思つてもみなかった。

ミカズは佐藤さんに渡すつもりだった手製のティーカップとコップを木箱に納めたまま、四年間の大学生活を終えて*₅内地に戻った。入社して四回目の春が来たとき、二十五歳のミカズは企業の研究職を続ける意欲を失っていた。新部長は一年で退き、元の部長が返り咲いたものの、だからといって新素材の開発に展望が開けたわけではなかった。

ミカズが会社から期待されている役割は、根気のある、精度の高い実験要員でしかない。やはり、なりゆきまかせなどと、呑気なこと

(他にもエラーがないか、原典と本文の再照合をお願いします。)

を言っていてはいけなかったのだ。

ミカズが行き詰^{づま}っていることは、由太郎さんにはお見通しだったのだろう。前年の年末に*6 竹富島を訪ねたとき、一冊のノートを渡された。秘伝ともいえるガラスと金属の配合、それに*7 炉の~~温度~~と加熱する時間が詳しく書き記されていて、ミカズは驚いた。

「いずれ、自分なりのガラスを生みだすにしても、まずは食べていけないとね」

由太郎さんはもう友人のためにしかガラスを*8 吹^ふいていない。唯一取引のある銀座の画商^{えいこう}に宛^あてた紹介状も渡されたが、それでもミカズはふんざりがつかなかった。

一九九〇年代なかばの日本経済は、一時期の勢いを失いつつあった。しかし、ミカズの目に、ひとびとは相変わらず浮かれているようにしか見えなかった。

飴色^{あめ}に溶けた高温のガラスに立ちむかい、精魂^{せいこん}込めてコップや杯^{さかずき}を作ったとしても、それを大切に使ってくれるひとたちの姿がイメーじできない。

佐藤さんに会いたくても、実家の住所がわからない。工学部の同窓会に問い合わせればわかるのかもしれないが、こんなでいたらくでは、^②とても顔を合わせられない。

*9 神宮外苑^{じんぐうがいえん}への深夜の散歩を唯一の気晴らしにしながら、ミカズは浮かない日々をおくっていた。もつとも、夜空を眺める余裕はなく、パークのフードで顔をおおい、足元は編み上げ靴^{くつ}で固めている。初めて沖繩に行ったときに、那覇^{なは}の国際通りで買った、底の厚い、頑丈な靴で、札幌^{さっぽろ}の雪にも余裕で耐えた。

四月もなかばをすぎ、去年までなら、ゴールデンウィークの竹富島行きを指折り数えていた。しかし、由太郎さんにはもう甘えられない。^B おめおめ訪ねていって、牛^は牛^はに阻^{はば}まれたら、とても生きていられない。耳の尖^{とが}った大型の猫は、由太郎さんが認めたひと以外を家に寄せつけなかった。

「火事だ」と声したのは、独身寮の近くまで戻ってきたときだ。バチバチと音がして、裏通りの一角が急に明るくなった。引き寄せられるように駆けてゆくと、「助けて、こどもがまだ二階に」と母親らしい女性が泣き叫^{さけ}んでいる。

燃えさかる家に飛び込んだミカズは、炎^{ほのお}に包まれた階段をのぼりながら、自分のからだを飴色に溶けてゆく気がした。

ルビを付けてください。

「ぼくは溶けてもいいけど、抱きかかえたあの子は、溶かしちゃいけないと思ったんだなあ」

意識を取り戻した病院のベッドで、ミカズは三年半ぶりに会う佐藤さんに語った。すると、*10 滂沱の涙が流れて、とまらなくなった。焼け落ちてきた壁板で肩から背中にかけて大やけどを負ったミカズは、うつ伏せのまま泣き続けた。パーカーのフードのおかげで顔は無事だったが、全治三〜四カ月の重傷と診断された。履いていたのが*11 軍靴でなければ、まちがいなく両足を失っていたという。

佐藤さんは毎週土曜日の夕方、都心にある病院にやつてきた。そして三〜四時間をとにもすぎし、消灯時間の午後九時前に帰ってゆく。深夜の火事を報じた早朝のニュース番組で、救出された男の子は軽症だが、近くに住む会社員の岸川ミカズさんは意識不明の重体と報道されたため、佐藤さんは気が動転したという。

「おたおたしていたら、母に叱られたんです。『なにがあっても、教員のつとめを果たしなさい。このひとだって、命がけで、ひととしてのつとめを果たしたんだから』って。それで出勤はしたんですけど、昼休みの職員室で、母からの伝言を記したメモに、『岸川さんは意識を回復したそうです』とあるのを見たとき、^③泣きぐずれてしまいました」

消火活動によって負傷した民間人に対しては、行政が治療費の全額を負担する。まさに、一命を賭しての救助だったため、ミカズは渋谷区長と東京都知事から表彰された。会社からは見舞い金が支給された。さらに全国のひとびとから称賛の手紙やカンパ、それに見舞いの品が送られてきた。

ミカズは東京での苦しかった日々を佐藤さんに話した。そして母に頼んで独身寮の部屋から持ってきてもらったガラスのティーカップとコップをようやく手渡した。

ティーカップの持ち手をレンガ色にしたのは、沖縄旅行のあとに北大構内で食事をしたとき、佐藤さんが着ていたセーターがとても似合っていたからだ。そそいだお茶が自然にゆれるように、ティーカップの側面や底がゆるやかに波打っている。

高さ十センチの淡い青色のコップは、由太郎さんに手ほどきを受けた琉球ガラスだ。廃材のガラスをふつうより長い時間、高温で熱することで、混入する気泡を少なくするのが特徴で、かたちもすっきりしているが、琉球ガラス特有の温かみは失われていない。

「ミカズさん、^④わたしの話を、途中でさえぎらないで、最後まで聞いてください」

病室のソファにかけた佐藤さんが、いつにも増して真剣な顔で言ったのは、七月の下旬だった。きのうが一学期の終業式で、きょうか

ら夏休みに入ったという。

ミカズは起きてベッドに腰かけた。背中はやけどはかなり癒えて、八月中旬に退院し、九月一日から職場に復帰することになっていた。「わたしの実家の敷地に工房を建てますから、そこでティーカップやコップを作ってください。いまの会社を辞めて、ガラス作家として身を立ててください」

佐藤さんは旧家の一人娘で、ともに教員をしていた両親は三年前の三月三十一日にそろって定年退職した。母親は家にいるが、父親は請われて幼稚園の園長をしている。

先日、担当の医師に尋ねたところ、半日なら外出してもかまわないそうだから、一度家に来てほしい。そして庭のどこにどのくらいの大きさの建物を造るのかを、具体的に考えてほしい。

「わたしたち、いまさらふりだしから始めて、双六のマス目をひとつずつ進んでいく意味はないと思うの」
佐藤さんの言いたいことはよくわかった。きっと、どう言えば、ミカズを傷つけずに済むか、頭を悩ませたにちがいない。

（こんな大ケガをする前に、自分でふんざりをつけていたら）
かなしみが胸をよぎり、背中が疼いた。すると、由太郎さんのことばが思いだされた。

「それは、運命が決めることだからよ」

会社を辞めたらとは言わないとはぐらかしたあとに、由太郎さんはそう続けたのだ。

（ようやく、⑥そのときが来たのか）

涙をこらえて大きく息を吸うと、力がみなぎった。

「たしかに、ふりだしに戻って、交際を一から始める意味はない」

立ちあがったミカズが右手を差しだすと、顔を赤らめた佐藤さんが右手を重ねた。

美術家や工芸家などの

〔注〕*1 工房……仕事場。

*2 生業……職業。

（佐川光晴「やさしく透きとおる」による）

- * 3 ローソク……芝が植えてある庭園などの場所。
- * 4 北大のキャンパス……北海道大学の構内。
- * 5 内地……北海道や沖縄で本州などをさしている表現。
- * 6 竹富島……沖縄県にある島。
- * 7 炉……ここでは、ガラスを溶かし、製品を作るためのもの。
- * 8 吹いていない……ガラス製品を作る技法に、溶かしたガラスに息を吹きこんで形を作るやり方がある。
- * 9 神宮外苑……東京にある明治神宮の庭園。
- * 10 滂沱の涙……とめどなく流れ出る涙。
- * 11 軍靴……軍隊用の靴。

加熱して

装置

誤肢を紛らわしくして難度を上げて下さい。

問一

——線A「鉢合わせ」・——線B「おめおめ」の意味として最も適切なものをあとからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

A 鉢合わせ

ア 約束して待ち合わせる事

イ 頭と頭がぶつかり合う事

ウ 思いがけなく出会う事

エ 将来について相談すること

オ 長い時間とともに過ごすこと

B おめおめ

ア 恥とわかっていながら平気でいるかのような様子

イ 相手の迷惑を考めいえようとしずない図々ずうしい様子

ウ 苦勞や不自由をまるで知らない呑気な様子

エ 心配がなくなつて心の底からゆつたりした様子

オ 相手に温かく迎えられるという自信のある様子

問二

——線①「まさか、それが北大のキャンパスで会う最後になるとは思つてもみなかつた」とありますが、これがどのようなことを表しているかを説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

なさい

ア 佐藤さんは三年生になつたらもつと忙しくなるだろうと言つていたが、その予想が完璧かんぺきに当たつたことに氣づいて驚いたこと。

イ 卒業式に出席できない状況になつたとしても、佐藤さんは自分に何らかの形で連絡してくれるべきだつたと失望したこと。

ウ ガラス作りや土木への夢を断念して就職することにしたのが氣まずいので、会えなくて良かったのかもしれないということ。

エ 渡すつもりだつたティーカップやコップを渡す機会は二度とないだろうと思ひ、彼女との交流をきつぱりとあきらめたこと。

オ 最後になるのなら、おたがいにもつとしっかりと話をするなど、少しでも悔くいが残らない形にしたかつたと残念だつたこと。

Aイを正解としないため、ここでの意味「のような又言を」に入れてください。

なさい

解答の赤入れを
ご確認ください。

ご再考ください。15-25字でまとめるには
難しく、今の答えのように書かざるには困難です。
「ミカズが傷つく」は つかみにくく、つかんだ場合は理由も
書かせないと

設問としてあまり意味がないと感じます。

(五) がラス戦人になるぶんざりがつかないことを、夢をかなえられないというまくおきかえらるのか
に訴えないため、35と45字としたいと思います。解答例はママでお願いします。

三 線② 「とても顔を合わせられない」とありますが、これはどのような気持ちを表したのですか。(顔を合わせられない理由)
とともに三十文字以上四十文字以内で説明せよ。しなさい

四 線③ 「泣きくずれてしまいました」とありますが、このときの佐藤さんの気持ちを説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分がお見舞いに行かないうちにミカズが意識を回復したと知り、やはり仕事を休んで見舞いに行くべきだったと悔やむ気持ち。

イ ミカズが命がけでひととしてのつとめを果たしたことを知り、それに比べて教員のつとめを果たしていない自分を責める気持ち。

ウ 意識を回復したミカズが、自分が大やけどを負って全治数カ月の重傷であると知ったときの衝撃を思っ、深く同情する気持ち。

エ ニュース番組を見たときからずっと心配でならなかったので、ミカズの意識が回復したと知って不安と緊張が一気に緩む気持ち。

オ 会えないまま過ごした三年半の間に高まり続けてきたミカズへの思いが、非常事態に際して抑えようもなく込み上げる気持ち。

問五 線④ 「わたしの話を、途中でさえぎらないで、最後まで聞いてください」とありますが、佐藤さんがこのように言ったのはなぜですか。十五文字以上二十五文字以内で説明せよ。しなさい

問六 線⑤ 「そのとき」とありますが、どういうときですか。十五文字以上二十五文字以内で説明せよ。しなさい

問七 この小説の作者佐川光晴の作品は、三島由紀夫賞や芥川龍之介賞の候補になったことがあります。三島由紀夫についての説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦後の日本の文学界を代表する作家で、主な小説作品には「仮面の告白」や「潮騒」「金閣寺」などがある。

イ 主に大正時代に活躍した作家で、短編小説が多く知られ、代表作には「羅生門」や「鼻」「芋粥」などがある。

ウ 明治末期から大正初期にかけて活躍した作家で、「吾輩は猫である」「坊っちゃん」「こころ」などで知られている。

エ 陸軍の軍医として働いたあと、作家として明治・大正期に活躍し、「舞姫」「高瀬舟」などの作品を残している。

オ 第二次世界大戦前から戦後にかけて次々と作品を発表した作家で、代表作には「人間失格」「斜陽」などがある。

活躍時期、作品名の羅列になっていますが、

駿台模試のように、人となりや

生涯についてもふれる腹を混せてください。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ほしい

*₁機械学習においては、機械は限られた数のデータをお手本にし、その中にある規則性や法則性を見いだそうとします。そうすることで、お手本の中に入力に対してでもできるだけ正解を出せるような*₂関数を求めるわけです。ただし、このときに機械がデータの中のどのような側面に目をつけているかは明確ではなく、私たちが認識していないような意外な法則性を利用している可能性があります。もちろん、それがAIに求められている仕事にとって本質的な法則性であれば何の問題もありません。しかし、もしそうでない場合は、たとえAIがうまく動いているように見えたとしても、それは「目のつけどころは間違っているが、その間違いがまだ露呈^{ろてい}していないだけ」ということになります。

このような意味で、機械学習を利用して開発されるAIは、どのように動作するかを完全に予測することができません。つまり、①ありとあらゆる入力に対して、つねに100%正しく動く保証することができないのです。このことは、AI全般の品質保証の問題につながります。たとえ商品として出荷する前のテストでは十分な精度が出ていたとしても、お客さんの手元でお客さんが与える入力に対して同じような精度が出るとは限りません。機械学習で開発されたAIが社会一般に浸透^{しんとう}するには、このような事実が広く認識される必要があるでしょう。

AIについてよく尋ねられる質問に、「AIには〇〇ができますか?」というものがあります。「AIは言葉を理解できますか?」「AIは感情を持つことができますか?」「AIには人間のような思考ができますか?」「AIに哲学^{ていがく}はできますか?」……などなど、挙げていけばきりがありません。しかし、こういったことについて考える前に、まずはつきりさせておかなくてはならないことがあります。それは、「その〇〇は、どんな仕事として定義できるのか?」ということです。

すでに見てきたように、AIの中身は「数(の並び)」を入力したら、数(の並び)を出力する関数^Aです。AIを開発するときには、先に「何を入力として、何を出力するか」、また「入力と出力をどんな数の並びとして表すか」を決めなくてはなりません。つまり、「AIにさせる課題(タスク)」を定義しなくてはならない^Bということです。^{*₃}深層学習はとても強力な方法なので、入力と出力をきちんと定義することができ、学習に使える良質のデータが大量にそろえば、さまざまな課題を高い精度で行える可能性があります。しかし、ただ「こんなことができるようになってほしいなあ」と思うだけではAIは作れません。

B 「言葉を理解できるAI」「感情

を持つAI」のような漠然^{ばくぜん}としたイメージを、漠然としたまま実現することはできないわけです。

今すでに世間では「人の言葉が分かるAI」とか「人の心が分かるAI」などといったことを謳^{うた}っているシステムもありますが、^②それらの実体は「雑談をするAI」だったり、「質問文を入力として受け付け、答えとなる単語を出力するAI」だったり、「文章を入力として、『喜び』『怒り』『悲しみ』などといった感情の種類を出力するAI」であつたりします。漠然とした宣伝文句に踊^{おど}らされないようにするためには、「そのAIがする具体的な仕事は、いったいどのようなか」を見極める必要があるでしょう。

また注意しなくてはならないのは、たとえ人間にとっては似たような仕事であっても、AIにさせる場合は「まったくの別もの」である可能性があるということです。人間の場合は、難しい文章を外国語に翻訳^{ほんやく}できる人が、文章の要約や日常会話、ましてや言葉の聞き取りもできることなどはほぼ当たり前で、不思議でも何でもありません。よって、機械に対しても、「こんなに高度な翻訳ができるんだから、文章の要約ぐらい簡単だろう」とか、「言葉の聞き取りが人間並みにできるんだつたら、当然日常会話はできるだろう」と思いがちです。しかし機械にとつては原則として、翻訳と要約、対話、音声の認識はどれも異なる仕事です。先に述べたように、BERTやGPT-3といった言語モデルを「何でもできるAI」と見なすのにも無理があります。

また、「機械学習によって作られたAIは、人間がすべてプログラムして作ったAIより融通^{ゆうそう}が利くはず」という意見を見たこともありますが、機械学習の「融通」は、あくまで「機械学習がうまくいっている場合は、本来の使われ方（それが本来すべき仕事）の範囲^{はんい}内で、開発時に使われるデータには存在しないデータに対しても、高い確率で正解を出せる」ということです。これは、必ずしも「本来想定していない使われ方をされても大丈夫」ということを意味しません。こういった点にも注意が必要です。

ここまでお話ししてきたように、機械学習を使ってAIを開発するときになされることは、私たち人間が行う知的な仕事を「何が入力で、何が出力か」という観点から定義し直し、^③機械がそれを上手に真似^{まね}するための「関数」を求めることです。そこには、私たち人間がそういった仕事をどのように行っているかという視点は必ずしも入っていません。よって、AIによる近似^{きんじ}がいくらうまくいったとしても、AIが人間と同じようにその仕事を行っているという保証はありません。

また、先にお話ししたとおり、現在の「言葉を扱うAI」のほとんどは、深層学習を用いて開発された^{*4} ニューラルネットワークです。つまり、言葉を扱うAIの中身は膨大^{ぼうだい}な^{*5} パラメータを持つ関数であるわけです。言葉を扱うAIの中身がそういった関数であるという

ことは、「今の機械の言葉」についての一つの重要な示唆しきを持っています。それは、「④ AIの中身を見ても、なぜAIが言葉をそのように扱ったのがよく分からない」ということです。

たとえば、「This is a pen.」という英語の文を入力として受け付けて、「これはペンです。」という日本語文を出力する機械翻訳システムを考えてみましょう。このAIにとっては、入力いりりの英語の文も、出力しゅつりきの日本語の文も「数の並び」です。たとえば機械翻訳システムを深層学習で開発する場合、「英語の原文」と「日本語の訳文」のペアを訓練データとして使い、ニューラルネットワークの中のパラメータを調整していきます。調整の結果、そのネットワークが十分な数の英語の文に対して正しい日本語訳を出力できるようになれば、開発は成功したことになります。

しかし、うまく開発できたネットワークを見ても、いったい「This is a pen.」という原文の何がどうなって「これはペンです。」に訳されるのかは分かりません。私たちに見ることができるのは、膨大な数のパラメータを持つ巨大なニューラルネットワーク、つまり非常に複雑な関数です。もちろん、「This is a pen.」に相当する数の並びが、ネットワークの中の各部でどのように計算されるか、またその計算の結果が出力に向かってどのように伝わっていくかは分かりません。しかし、そのネットワークが「これはペンです。」に相当する数の並びを出力するまでの過程は、あくまで「数の計算」でしかなく、原文のどの部分が訳文のどの部分にどのように反映されているのかを直接見ることはできません。つまり、私たちが人間に理解できる形で「AIの振る舞い」を捉えることはきわめて難しいのです。

こういった、「AIがなぜそのような振る舞いをしたのかを理解できない」という問題は、AIの「*6 ブラックボックス問題」と呼ばれています。これは、言葉を扱うAIに限らず、深層学習を利用して開発したAIに共通して見られる問題です。⑤「分からなくなつて、うまく動くなら問題ないじゃないか」と思う人もいるかもしれませんが、先に指摘したように、今のAIは私たちが想定していないような間違いをします。たとえば平昌オリンピックピョンチャンピックの際には、ノルウェー選手団の料理人が機械翻訳を使って卵を1500個注文したところ、訳文ではなぜか1桁増けたえて「15000個」となっており、注文の十倍の卵が届いて困ったという話もありました。

中身がよく分からないということは、AIが間違いを起こした場合に原因を突き止めることが難しく、改善点を見つけるのも難しいということを意味します。こういったことは、人々の健康や安全、経済的・社会的な利益に関わるような部分に技術を応用するときには大きなハードルになります。

このような問題を受け、近年では、AIの振る舞いを人間に理解可能な形で説明する技術に関心が高まっています。アメリカの国防高等研究計画局（DARPA）では、「説明可能AI（Explainable AI: XAI）」の開発が推進されています。ただし、一部の研究者からは、そういった技術が本当にブラックボックス問題を解決できるのかを疑問視する声も上がっています。

（川添愛^{かわぞえあい}「ヒトの言葉 機械の言葉」による）

〔注〕 *1 機械学習……機械が経験から学習できるようにする技術や手法。

*2 関数……入力されたものに応じて決められた処理を行い、その結果を出力する計算式。

*3 深層学習……機械学習で、機械自身がデータの特徴をとらえ、より正確で効率的な判断を行えるようにする技術や手法。

*4 ニューラルネットワーク……人間の脳神経をもとに情報を処理する回路。

*5 パラメータ……指示の内容。

*6 ブラックボックス……処理の過程が不明な物事。

この説明ではよくわかりません。

？「模したという要素が説明に必要ではないでいふ。」

問一 A・B に当てはまる最も適切な語を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし同じものは二度使えません。

ア なぜなら イ よって ウ つまり エ しかるに オ もしくは カ ところで

問二 C に当てはまる最も適切な語を本文中から漢字二字でさがし、抜き出して書け。

きなさい

なさい

言い回しがわかりづらく感じられます。

問三 — 線①「ありとあらゆる入力に対して、つねに100%正しく動く」と保証することができない」とありますが、これはどういう

ことですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア AIは限られた数のデータしか手本にできていないために、100%正しく動くほどの情報を得られたとは言えないということ。
- イ 機械学習ではデータから規則性や法則性を見いだすことは難しく、不十分な能力をもったAIしか生み出せないということ。
- ウ AIが学習の段階で見いだす法則性は人間にはわからず、適切でないものを法則として身につけているかもしれないということ。
- エ 機械学習では本質的な規則性や法則性しかAIに教えることがないため、手本通りでない入力には対応できないということ。
- オ AIが身につけた法則性は仕事にとって本質的なものではないため、かなりの間違いを含んでいる可能性があるということ。

問四 — 線②「それらの実体は『雑談をするAI』だったり、『質問文を入力として受け付け、答えとなる単語を出力するAI』だった

り、『文章を入力として、『喜び』『怒り』『悲しみ』などといった感情の種類を出力するAI』であつたりします」とありますが、こ

れはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雑談をしたり、質問に対する答えを出力したり、感情を出力したりできる、現代におけるきわめて高度なAIということ。
- イ 雑談をするAIは雑談だけ、質問に答えるAIは質問に答えるだけのように、単一の機能しか持たないAIということ。
- ウ 漠然とした宣伝文句であり、実際には雑談も質問に対する回答も感情の出力もできない低機能なAIでしかないということ。
- エ 雑談や質問への回答や入力に応じた感情の出力ができるが、別に人の言葉や心が分かるAIというわけではないということ。
- オ 漠然とした宣伝文句に踊らされて高価な買い物をしてしまう人があつたとをたない、悪質な詐欺まがいのAIということ。

問五 — 線③「機械がそれを上手に真似するための『関数』とありますが、筆者は機械の動作をなぜ「真似」と表現しているのですか。

三十文字以上四十文字以内で説明せよ。

しなさい。

不要では？

口語的に感じるので修正してください。

ご再考ください。

現状、何を答えるべきかわかりづらく、結局「真似」の語義を本文にあてはめるような、

あまり本文読解を要しない設問になっていると思われまふ。

否定しがたいのではないだろうか。

膨大な計算だから処理(＝理解)できない、ということになってしまわないだろうか。

問六 — 線④「AIの中身を見ても、なぜAIが言葉をそのように扱ったのかがよく分からない」とありますが、これはどういうこと

ですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア AIは学習して自ら身につけた新しく優れた法則に基づいて言葉を扱うので、人間には考え方を知ることができないということ。

イ 深層学習がうまく行けば行くほど、AIは人間を超えた存在に成長していくので、もはや人間にはついていけないということ。

ウ ニューラルネットワークで進化したAIは互いに独自の言語を用いて通信し合い、それは人間には分からない言語だということ。

エ AIの中身は膨大なパラメータを持つ関数であり、人間が見たところで、とても処理できる量ではなくなっているということ。

オ AIの中身を見て出力までの過程を確認しても、人間にとつては数の計算でしかなく、具体的な方法は理解できないということ。

問七 — 線⑤『分からなくなつて、うまく動くなら問題ないじゃないか』と思う人もいるかもしれませんが、筆者は、こ

うした考え方の問題点としてどういうことを挙げていますか。三十字以内で説明せよ。しなさい

本文の内容に当てはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア AIの動作が正確かどうかはAI全般の品質保証の問題につながるものなので、たとえ商品として出荷する前のテストでは十分な精度が出ていたとしても、100%正しく動く保証がなければ販売すべきではない。

イ AIについて筆者がよく尋ねられる質問に「AIには〇〇ができますか？」というものがあるが、それをまとめると、「AIは人

間以上に進化した存在と言えますか？」ということになり、AIへの期待が読み取れる。

ウ 深層学習はとても強力な方法なので、ある意味では危険をともなっていると考えられ、入力と出力をきちんと定義することがで

きて学習に使える良質のデータが大量にそろわない限り、できるだけ行わない方がよい。

エ 機械学習で作られたAIは人間がすべてプログラムしたAIより融通が利くという考え方もあるが、想定していない使い方がで

きるという意味で融通が利くわけではないので、使い方には気をつけなければならぬ。

オ AIの動作を人間に理解可能な形で説明する技術に関心が高まってきているが、本当にブラックボックス問題を解決できるのか

を疑問視する一部の研究者からの反対によって、「説明可能AI」の開発は遅れている。

易しすぎるので修正してください。エは、文がこねられていない感じがするから目立ち、選びやすいです。また、誤肢も誤りの部分があり、極端に成りきれ、すぐに×と判断できてしまいます。

(あがりさま)

四

次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

なさい

賀茂祭かものまつりを殿上人てんじょうびとが並んで見物ものづかいしていたところ、元輔もとすけは早くその前を通ろうと思つて馬を強く蹴けつたため、馬が暴れて落馬してしまつた。

*1 君達きみたちあなみじと見る程に、いとく起きぬれば、冠かぶり脱げにけり。 *2 髻もとどりつゆ露なし。ただ *3 ほとぎを被かぶきたるやうにてなんありける。

*4 馬添うまぞひ、手惑てまどひをして、冠を取りて着せさすれど、後ろざまにかきて、「あな騒がし。しばし待て。①君達に聞こゆべき事あり」とて、殿

上人じやうじんどもAの車くるまBの前に歩み寄る。日ひCのさしたるに頭かたきらきらとして、いみじう見苦し。大路だいじDの者、*5 市いちをなして笑ひのしる事限りなし。

車・棧敷さじきの者ども笑ひのしるに、一つEの車の方かたざまに歩み寄りていふやう、「君達、この馬より落ちて冠落としたるをば、*6 をこなりと

や思ひ給ふ。② *7 しか思ひ給ふまじ。その故ゆゑは、*8 心ばせある人だにも、物につまづき倒るる事は常の事なり。まして馬は心あるものにあ

らず。この大路はいみじう石高し。馬は*9 口を張りたれば、歩まんと思ふだに歩まれず。と引きかう引き、くるめかせば、倒れんとす。馬

を悪あしと思ふべきにあらず。 *10 唐鞍からくらはさらなる鐙あぶみの、かくうべくもあらず。それに、馬はいたくつまづけば落ちぬ。それ悪しからず。ま

た冠の落つる事は、*11 物して結ふものにあらず、髪をよくかき入れたるにとらへらるるものなり。それに *12 髻びんは失うせにたれば、*13 ひた

ぶるになし。されば落ちん事、冠恨くらむべきやうなし。また例なきにあらず。何の大臣おとどは 大嘗会おとといの御禊みそぎに落つ。何の中納言はその時の行幸に

落つ。かくのごとく例も考へやるべからず。しかれば、案内も知り給はぬこの比くらの若き君達、笑ひ給ふべきにあらず。笑ひ給はばをこなる

くやしすぎない注を付けてください。

べし」とて、車ごとに手を折りつつ数へて言ひ聞かす。

かくのごとく言ひ果てて、「冠持て来」というてなん取りてさし入れける。その時に、どよみて笑ひののしる事限りなし。冠せさすとして、馬添の曰く、落ち給ふ則ち冠を奉らで、*14 などかくよしなし事は仰せらるるぞ」④と問ひければ、「痴事な言ひぞ。かく道理をいひ聞かせたらばこそ、この君達はのちのちにも笑はざらめ、さらずは、口さがなき君達は長く笑ひなんものをや」とぞいひける。人笑はする事役にするなりけり。

（『宇治拾遺物語』による）

〔注〕 *1 君達……身分の高い人。

*2 髻……頭頂部の髪かみの毛。

*3 ほとぎ……素焼かめきの瓶。

*4 馬添……馬の口につけた縄なわを引いて歩く役目の者。

*5 市をなして……大勢集まって。

*6 をこ……おろか。

*7 しか思ひ給ふまじ……それは間違いである。

*8 心ばせある人……思慮しりょ深い人。

*9 口を張りたれば……口を縄で引っ張られているので。

*10 唐鞍はさらなる鎧よろいの、かくうべくもあらず……唐風の鞍は平べったく、足をのせるはずの鎧には足のかけようがない。

*11 物して結ふものにあらず……ひもなどで結びつけておくものではなく。

*12 鬢……頭の両側の髪かみの毛。

* 13 ひたぶるになし……まったくない。

* 14 など……どうして。

問一

——線 A→E「の」の意味が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二

——線①「君達に聞こえないことがある」の現代語訳として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 君達に申し上げるべきことがある

イ 君達にしか聞こえないことがある

ウ 君達が声を上げるべきことがある

エ 君達が聞かなくて当然のことがある

オ 君達の耳には入らないことがある

問三

——線②「しか思ひ給ふまじ」とありますが、この言葉には元輔のどのような気持ちがこめられていますか。その説明として最も

適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どうしてこんな間違いをするのかと不思議がる気持ち。

イ はたして分かってもらえるだろうかと不安に思う気持ち。

ウ 君達を批判して大丈夫だろうか^{こうかい}と後悔する気持ち。

エ 君達の間違いへの怒りから激しく責めたてる気持ち。

オ 間違いを指摘^{してき}して何とか理解してもらおうとする気持ち。なさい

問四

——線③「さし入れける」の主語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 君達

イ 元輔

ウ 馬添

エ 大路の者

オ 棧敷の者

問五

——線④「と問ひければ」とありますが、直前の「」の記号で終わるこのせりふのはじめには「」の記号は付いていません。この

せりふのはじめはどこからですか。本文中から三字でさがし、抜き出して書け。なさい

迷う余地がほぼなく（短いので）易しすぎます。ご再考ください。

問六

本文の内容に当てはまらないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 落馬した元輔はすばやく起きあがったが、冠が脱げてしまい、瓶をかぶったような頭が丸見えになっていた。
- イ 元輔は君達に、相手を老人だと思つて笑つていると、いづれ自分が老人になったときに後悔すると忠告した。
- ウ 元輔は君達に、馬がつまずいて倒れることにも冠が落ちることにも理由があり、先例もあることであると話した。
- エ 元輔は君達に、今回の事態は馬が悪いのでも元輔自身が悪いのでもなく、通りの不便さが問題なのだと主張した。
- オ 元輔は馬添に、道理を言い聞かせなければ口さがない君達はいつまでも人を物笑いの種にするだろうと話した。

不自然な表現に感じられるので
ご修正ください。

可能動詞にする、自動詞他動詞の形が紛らわしいものにするなど、終止形への直しまちがいを誘うような語に変更してください。

五

次の各問いに答えよ。

問一

「ある程度の予定が決まれば、その日時までにどういった準備をするかも決まってくる」の「どう」の品詞名を漢字で書け。

問二

次の――線の動詞の活用の種類をあとからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。またそれぞれの活用形も漢字で書け。

(1) 母はいつまでも私の過ちを叱ろうとはしなかった。

(2) 何となくさびしくて、誰かといっしょにいたかった。

ア 五段活用 イ 上一段活用 ウ 下一段活用 エ カ行変格活用 オ サ行変格活用

問三

次の――線の「不意に」はどの言葉にかかりますか。その言葉を一文節で抜き出して書け。

いつのことだっただろうか、不意に真冬の晴れ渡った空を、勤務していた会社の通用口のドアに手をかけようとしたときに思い出したことがあった。

問四

次の――線の「ない」と文法的な働きが同じものをあとから一つ選び、記号で答えよ。

こんなにうまくいくなんて、自分でも全く信じられないくらいです。

ア 今までに読んだことがないほどおもしろい本だ。

イ もう一度試してみても結果に大差はないだろう。

ウ 空気抵抗の影響は軽視できるほどは小さくない。

エ あまりに難しい内容で意味がよくわからない。

オ そんなことをするのはあぶないからやめなさい。

問五

次の一文中に自立語はいくつありますか。漢数字（一、二、……）で答えよ。

来年になったら他県に引越すことがすでに決まっていた。

易しいので、「だけ」「ほど」「ばかり」など、うっかり自立語としてしまいそうな助詞を含めた文にしてください。

文が不自然なので、こなれさせてください。

いくつか活用させるなどして、難度を上げてください。

※設問にあわせてご修正ください。

一 へ
解答

- (1) 貴族 (2) 児童 (3) 電池 (4) 汽笛
(5) そうまとう (6) ゆうげん (7) こことち
(8) すいま

各2点×8＝16点

二 問一 A ウ B ア
問二 オ

★問三

例

夢をかなえられず仕事への意欲も失っているため、状況を知られるのが情けない気持ち。【6点】

〈採点基準〉

①夢をかなえられず仕事への意欲も失っているという内容。

【3点】

②(①を)知られるのが情けないという内容。【3点】

〈正答例〉

ガラス作りどころか企業の仕事もいやになった状況では、会うのが恥ずかしい気持ち。

〈減点例〉

夢をかなえるところか仕事につまずいている状況なので、顔を合わせたくない気持ち。(②なし)

問四 エ

★問五

例

ミカズが傷ついて話を聞かないことを恐れたから。【5点】

〈採点基準〉

ふつうは入らないと思われれます。代わりに「覚悟を決める」と入れても、②があれば①は必須とはならないのでは？
ないでしうか。

①ミカズが傷つくという内容。【3点】

②(①のためにミカズが)話を聞かないことを恐れるという内容。【2点】

〈正答例〉

ミカズが傷つき話を聞こうとしないかもしれないから。

〈減点例〉

ミカズが話を聞こうとしなかったら困ると思ったから。

(①なし)

★問六

例

自分の工房をかまえて、ガラス作りを生業とするとき。【4点】

〈採点基準〉

①自分の工房をかまえるという内容。【2点】

②ガラス作りを生業とするという内容。【2点】

〈正答例〉

工房をかまえてガラス作りで働く夢をかなえるとき。

〈減点例〉

ガラス作家として身を立てるとい夢をかなえるとき。

(①なし)

問七 ア

問一・問七 各2点×3＝6点

問五 5点

問六 4点

問三 6点

他 各3点×2＝6点

三

問一 A イ B ウ

問二 定義

問三 ウ

問四 エ

★問五

例 人間と同じ仕事をしているように見えても、あくまでも見かけ上のものではないから。【6点】

〈採点基準〉

① 行う仕事自体は人間と同じに見えるという内容。【2点】

② (人間が仕事をどのように行っているかといった点まで同じなわけではなく) あくまでもプログラムで決められた表面的なものだという内容。【4点】

〈正答例〉

仕事の結果は人間に近くても、そう見えるだけで意識や取り組み方などは異なるから。

〈減点例〉

機械は目的意識や意欲などは持たず、単に決められた動作をしているに過ぎないから。(①なし)

問六 オ

★問七

例 間違いがあったときに原因や改善点を見つけるのが難しいこと。【3点】

〈採点基準〉

① 間違いがあったときという内容。【1点】

② (①において) 原因や改善点を見つけるのが難しいという内容。【2点】

四

〈正答例〉

A I が間違いを起こした場合に原因や改善点がわかりにくいこと。

〈減点例〉

原因や改善点を見つけにくく、今後の応用が難しくなること。(①なし)

問八 エ

問一・問二 各2点×3＝6点

問五 6点

他 各3点×5＝15点

問一 C

問二 ア

問三 オ

問四 イ

問五 落ち給

問六 イ・エ※完答。順不同可。

各3点×6＝18点

五

問一	副詞
問二	(1) ア 未然形 ※完答
問三	(2) イ 連用形 ※完答
問四	エ 思い出した
問五	ハ

各2点×6＝12点
合計100点

〈 配 点 〉

一 各2点×8＝16点

二 問一・問七 各2点×3＝6点

問五 5点 問六 4点 問三 6点

他 各3点×2＝6点

三 問一・問二 各2点×3＝6点 問五 6点

他 各3点×5＝15点

四 各3点×6＝18点

※問六は完答。

五 各2点×6＝12点

※問二(1)・(2)は完答。

合計100点

それそれ

〈 解 説 〉

一 漢字の読み書き

(1) 「貴」には、「たつと(い)」「とうと(い)」「たつと(ぶ)」「と

うと(ぶ)」という同じ意味でさまざまな訓読みがある。「族」を

「旅」と書き間違えないように注意する。

(2) 「児」には「ニ」という音読みもある。「小児」などの熟語が

ある。「童」の訓読みは「わらべ」。

(3) 「電池」のチが「池」であることに注意する。「地」と書き間違

えないようにする。

(4) 「笛」の訓読みは「ふえ」。他に「警笛」などの熟語がある。

(5) 「そうまとう」とは、外側に薄い紙や布などを張り、内側には

いろいろな形を切り抜いた円筒などを立てて、中心にろうそくを

置いたもの。ろうそくに火をともしと円筒が回り、張った紙や布

に影絵が映って回転して見える。「走馬灯のよう」は、過去のこと

が次々に思い出されることのたとえとして用いられる。

(6) 「ゆうげん」とは、言葉には表しがたい、ほのかで深い美など

をいう言葉。

(7) 「心地」を「ここち」と読むのは特別な読み方で、心の状態と

いう意味。

(8) 「すいま」とは、魔物によつて眠りに引きずり込まれるような

途方もない眠さをいう言葉。

設問にあわせて修正ください。

二 小説文の読解

《出典》佐川光晴「やさしく透きとおる」(『猫にならって』実業之日本社 二〇二三年 所収)

作者は小説家。一九六五年生まれ。二〇〇〇年『生活の設計』で新潮新人賞を受賞しデビューする。他の受賞歴は、野間文芸新人賞、坪田譲治文学賞など。著書は他に、『おれのおばさん』『駒音高く』『大きくなる日』などがある。

*問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

問一 A 「鉢合わせ」には、頭と頭とがぶつかり合うことと、思いがけなく出会うことの二つの意味がある。ここでは、大学のロインでの出来事であり、短時間だが普通に話しているので、後者の意味であることがわかる。 B 「おめおめ」とは、悪いことなどをやって、それが恥ずかしいことだと自分でもわかっているはずなのに、まるで平気でいるような態度を見せること。「秘伝」ともいえるガラスと金属の配合」などを書き記したノートをもらい、「銀座の画商に宛てた紹介状」までもらったのに、ガラス作りに踏み出すことができないままにいるというのは、由太郎さんの好意を無にしている恥ずかしい状況と言える。それなのに、それを恥ずかしいと思っていないかのように平気な顔で由太郎さんを探ねていくというのは難しいと、ミカズは感じているのである。

設問にあわせて修正

問二

「まさか……思ってもみなかった」という表現からは、この状況が完全に想定外だったことがわかる。続く一文からは、「佐藤さんに渡すつもりだった手製のティーカップとコップ」を渡せないままになってしまったことへの無念さがあることもわかり、もし最後になるとわかっていれば違った行動をしていたはずなのというミカズの心残りが読み取れる。したがって、才が適切である。アは、「その予想が完璧に当たったことに気づいて驚いた」が合わない。「おたがい、いま以上に忙しくなってしまう」という佐藤さんの予想については、このとき以前に「ふたりはそれきりゆつくり話す機会を持てないまま」になっていたときからすでにわかっていたことであり、いまさら驚くようなことではない。イは、「佐藤さんは自分に何らかの形で連絡してくれるべきだったと失望した」が合わない。祖父の容体の急変という非常時に、佐藤さんにそのようなことを要求したいと思うような人物としてミカズは描かれてはおらず、本文のどこにもそうした恨むような気持ちは示されていない。ウは、「土木への夢を断念して就職することにした」や「会えなくて良かった」が合わない。ミカズのガラス作りへの夢は述べられていたが、佐藤さんが「土木への夢を断念して就職することにした」ということは読み取れず、また、「会えなくて良かった」というのは「渡すつもりだった手製のティーカップとコップ」の存在とつじつまが合っていない。エは、

国語が苦手な子にとっては、飛躍(省略)があって
わかりづらいと感じます。修正をお願いいたします。

「ティーカップやコップを渡す機会は二度とないだろうと思い、彼女との交流をきっぱりとあきらめた」が合わない。このあとの内容で、ミカズがティーカップやコップをそのまま大事に持ち続けており、佐藤さんに会いたいという気持ちを持つことがあったことも述べられている。

問三 直前に「こんなでいたらくでは」とあることに着目する。「ていたらく」とは、もともとは単に様子や状態という意味の言葉だが、現在では、胸を張れないような残念な様子や状態を表現する言葉として用いられることが多い。ミカズは自分のことを「こんなでいたらく」として残念な状態にあると感じているのである。具体的には、「企業の研究職きぎょうを続ける意欲を失っていた」ということと、由太郎さんが助力してくれていてもふんざりがつかずにガラス作りに踏み出すことができていないことが挙げられる。「いつか自分の工房をかまえて、ガラス作りをしたい」と話した佐藤さんに、それもできず企業での仕事にも打ち込めない状況を知られるのが情けなく恥ずかしいために、「とても顔を合わせられない」のである。

問四 佐藤さんが泣き崩れてしまったのは、ミカズが「意識を回復した」と知ったときである。ミカズは「意識不明の重体」だったので、意識を回復したということは、とりあえずは死なないで済んだということの意味している。朝にニュースを見て「気が動転

好にわかりづらいです。

した」佐藤さんだが、母から「教員のつとめを果たしなさい」と叱られて無理に出勤している。ずっとミカズの容体を心配していたと考えられるので、意識を回復したと知って、佐藤さんは安心し、緊張が緩んで泣いてしまったのである。したがって、エが適切である。アは、「仕事を休んで見舞いに行くべきだったと悔やむ」が合わない。佐藤さんが見舞いに行かなかったせいでミカズが意識を取りもどさなかったというのなら、見舞いのことを悔やむのもわかるが、佐藤さんが見舞いに行かなくてもミカズは意識を回復したのだし、~~別~~意識を回復する前に見舞いに行かなければならないわけではないのでつながらない。イは、「教員のつとめを果たしていない自分を責める」が合わない。佐藤さんは、母から「教員のつとめを果たしなさい」と叱られて、動転しながらもちゃんと出勤している。ウは、「自分が大やけどを負って全治数カ月の重傷であると知ったときの衝撃を思っ、深く同情する」が合わない。佐藤さんが見たニュースでは「大やけどを負って全治数カ月」ということが報じられていたかどうかはわからず、仮に報じられていたとしても同情するのはそのニュースを知ったときであって、意識が回復したミカズの感じたであろう衝撃を想像した上で今さらのように同情するというのはおかしい。オは、「会えないまま過ごした三年半の間に高まり続けてきた」「非常事態に際して抑えようもなく込み上げる」が合わない。「高まり

続けてきた」かどうかは本文から読み取ることができず、「非常事態」というならミカズが「意識不明の重体」であるときであつて、意識を回復してから「非常事態」と捉えて気持ちが込み上げるといふのはおかしい。

問五

このあとの「わたしの話」は、佐藤さんが自分の実家の敷地^{しきち}に工房を建てるから、ミカズには会社を辞めてそこでガラス作家として身を立ててほしいというもの。これは、ミカズが自分の力では工房を作ることにもガラス作家になることもできないということと言っているようでもあり、それがミカズを「傷つけ」ることになることを佐藤さんは心配していたのである。そこで佐藤さんは、「いまさらふりだしから始めて……意味はないと思うの」、つまり、いまさら交際を一から始めずに結婚^{けっこん}すれば、自分の実家の敷地に工房を建ててそこでミカズがガラス作りをするのはおかしいことではない（ミカズに力がないせいだということにはならない）など、懸命^{けんめい}に「ミカズを傷つけずに済む」ような話をしようとしている。途中でミカズが話をさえぎってしまうと、こうした工夫を聞いてもらうこともなく、話が終わってしまうので、それを防ぎたかったのである。

問六

前で、由太郎さんが「それは、運命が決めることだからよ」と言っている。この「それ」は「会社を辞め」てガラス作りを生業とするかどうかということである。ミカズは、「こんな大ケガ

慕っていた、ということを書いていい？

をする前に、自分でふんぎりをつけていたら」と悔やんでいる。大ケガをしたことで、佐藤さんにミカズを傷つけるかもしれない決断を強^しいてしまうことになり、その前に自分自身が心を固めていれば佐藤さんにそんな負担を感じさせずに済んだという思いが込み上げたのである。佐藤さんに「たしかに、ふりだしに戻って、交際を一から始める意味はない」と言っているが、これは佐藤さんの提案を素直に受け入れるという意思表示なので、佐藤さんと結婚するということに重点があるわけではないため、「ずっと思っていた佐藤さんと結婚することを考えるとき」のような解答は正解とは言えない。

問七 イは芥川龍之介、ウは夏目漱石、エは森鷗外、オは太宰治についての説明である。

三 論説文の読解

《出典》 川添愛『ヒトの言葉 機械の言葉』（KADOKAWA 二〇二〇年）

筆者は、言語学や情報科学をテーマに著作活動を行っている。主な著作に『聖者のかけら』、『数の女王』、『白と黒のとびら』などがある。

*問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

問一 前後の文脈を丁寧^{ていねい}に追って考える。A の前で、A I の中

表現

身を「数（の並び）を入力したら、数（の並び）を出力する関数」と述べており、Aのあとでは、AIを開発する際に必要なことは入力と出力の条件だと述べている。前の内容が理由となつて、当然の結果があつて述べられているので、Aには順接の接続語である「よつて」が当てはまる。Bの前の文は「ただ……思うだけではAIは作れません」であり、Bのあとの文は「漠然としたイメージを、漠然としたまま実現することはできないわけです」である。前の内容をより詳しく言いかえて説明しているので、Bには言いかえて説明する接続語の「つまり」が当てはまる。

問二

Cを含む段落で示されているのは「漠然とした」文句で示されるようなAIは適切ではなく、仕事はCされているかどうかは肝腎だということである。これは前の段落でも「漠然としたイメージを、漠然としたまま実現することはできない」として、「AIにさせる課題（タスク）を定義しなくてはならない」と述べられていたことと同じである。さらにその前の段落の終わり、AIにできる〇〇について「その〇〇は、どんな仕事として定義できるのか」ということが重要だとされていたことから、AIで見極めるべき重要な点はその仕事の定義であるという主張が読み取れる。

問三 直前の文で「このような意味で、機械学習を利用して開発さ

れるAIは、どのように動作するかを完全に予測することができません」と述べられている。「このような意味」とは、その前の段落で述べられている「機械がデータの中のどのような側面に目をつけているかは明確ではなく、私たちが認識していないような意外な法則性を利用している可能性」があることを指している。AIが動作の基準として身につけた法則性を人間は認識できていないのである。法則性がわかっているならば、ある入力ですれば確実にその法則性に基づいた動作が行われることになるが、法則性がわからないので、入力に対する動作が確実にわからないということになる。したがって、ウが正解である。アは「限られた数のデータしか手本にできていないために……情報を得られたとは言えない」が合わない。情報量が少ないから適切な動作ができないということではない。イは「データから規則性や法則性を見いだすことは難しく」が合わない。規則性や法則性は見いだせるが、どのような規則性や法則性を見いだしたかが人間にはわからないので、それが適切かどうかが明らかでないのである。エは「機械学習では本質的な規則性や法則性しかAIに教えることがない」が合わない。「本質的」であれば「何の問題もありません」と述べられている。オは「AIが身につけた法則性は仕事にとって本質的なものではない」が合わない。「本質的なもの」である可能性もあるが、人間にはそれがわからないということである。

まともの方に丁寧さが欠けていると感じます、もう少し親切に解説してください。

問四 ――線②の中の「実体」というのが、何に対して言われているものなのかを確認する。直前で述べられていた「人の言葉が分かるAI」や「人の心が分かるAI」に対して、実体はそうではなく、単に雑談ができた、質問に答えることができた、感情を示すことができたというだけのことである。それらのことができるからといって、言葉や心が分かっているということにはならないということを示している。

問五 ここまでの内容で、筆者は「たとえ人間にとつては似たような仕事であっても、AIにさせる場合は『まったくの別もの』である可能性がある」など、翻訳や要約、会話などをAIがする場合、目に見える結果は同じでも、やり方はAIと人間でまるで異なっているかもしれないと述べている。表面上は同じに見えても、内実はまったく違うので、「真似」ではなく、「近似」ではないといふのである。

問六 直後に「たとえば」とあるので、そこから始まる内容が具体的な例になっている。入力された「This is a pen.」などの英文を日本語文にして出力するという機械翻訳システムの場合、正しい日本語を出力できれば目的は達成できるが、どのようにして翻訳がされているかをAIの中身を見て知ろうとしても、「どのように計算されるか、またその計算の結果が出力に向かつてどのよう

設問にあわせて修正

うに伝わっていくか」はわかるが、それは人間にとっては単なる「数の計算」であり、「原文のどの部分が訳文のどの部分にどのように反映されているのか」というようなことは知ることができないのである。したがって、**オ**が正解となる。**ア**は「新しく優れた法則」といった人間の法則と比較した価値基準で述べられているわけではないので不適切。**イ**は「AIは人間を超えた存在に成長していく」が、**ウ**は「AIは互いに独自の言語を用いて通信し合い」が、**エ**は「とても処理できる量ではなくなっている」が本文に書かれている内容と合わない。

問七 直後で「今のAIは私たちが想定していないような間違いをします」と述べた上で、「中身がよく分からない」ということは、AIが間違いを起こした場合に原因を突き止めることが難しく、改善点を見つけるのも難しいということを意味します」と問題点を指摘している。続く「こういふことは、人々の健康や安全、経済的・社会的な利益に関わるような部分に技術を応用するとき大きなハードルになります」とも問題点と言えるが、前者から派生するものなので、直接の問題点は前者であり、これをまとめる。**ア**は「100%正しく動く保証がなければ販売すべきではない」が合わない。筆者は「商品として出荷する前のテストでは十分な精度が出ていたとしても、お客さんの手元でお客さんが与える入力に対して同じような精度が出るとは限りません」「AIが

社会一般に浸透するには、このような事実が広く認識される必要がある」とは述べているが、「販売すべきではない」といった規制を考[?]えてはいない。イは「『AIは人間以上に進化した存在と言えますか?』ということになり」が合わない。筆者への質問はいずれも、AIが人間と同じことができるかというものであつて、人間を超えたことができるかという質問ではない。ウは「ある意味では危険をとまなつていると考えられ」「できるだけ行わない方がよい」が合わない。深層学習に危険性があるとは述べられていない。エは「機械学習によって作られたAIは、人間がすべてプログラムして作ったAIより融通が利くはず」という意見を見たこともありすが……必ずしも『本来想定していない使われ方をされても大丈夫』ということを意味しません。こういった点にも注意が必要です」という内容と合っている。オは「一部の研究者からの反対によつて、『説明可能AI』の開発は遅れている」が合わない。疑問視する声も上がつてはいるが、反対意見があるとは述べられておらず、開発の遅れにも言及されてはいない。

四 古文の読解

《出典》『宇治拾遺物語』

『宇治拾遺物語』は、鎌倉時代かまくらの初期に成立したとされる説話

集で、貴族説話、仏教説話、民間説話などが収められている。

問一 Cの「の」は「が」に言い換えられる主語を表す意味の「の」。

現代語の「ぼくの書いた文章」で、「ぼくの」の「の」を「が」に言いかえて「僕が書いた文章」にできるのと同じである。他の「の」は「が」に言い換えられないので主語を表す意味ではない。

問二 このあとの実際の元輔の行動から判断できる。このあと元輔は、君達に対して長々と演説をしている。

問三 間違いを指摘し、そのあとも理屈りくつを並べたり例を挙げたりひたすら話し続けている様子から判断する。最後の方で馬添の問いかけに対して「道理をいひ聞かせ」と言っていることもヒントになる。

問四 「冠を持って来い」と馬添に言い、持ってきた馬添から冠を受け取つて、そこに頭を差し入れた人なので、元輔である。

問五 前にさかのぼっていくと、「馬添の曰く、」というせりふの始まりを示す部分があるので、その直後からせりふが始まっていることが分かる。

設問にあわせて修正

問六 イのようなことは元輔の話の中に出てきていない。エは、「今回の事態は馬が悪いのでも元輔自身が悪いのでもなく」までは話の中に出てきており、石でこぼこしている通りの不便さにも言及していたが、それが問題なのだと主張していたわけではない。

〈現代語訳〉

君達が「ああ大変だ」と見ているうちに、とてもすばやく起きあ

がつたところ、冠が脱げてしまった。髻が全然ない。ただ素焼きの瓶をかぶっているようであった。

馬添が、うろたえて、冠を取ってかぶせようとするが、(元輔は)頭の後ろの方へ押しやって、「ああ騒がしい。しばらく待て。君達に申し上げたいことがある」と言って、殿上人たちの車の前に歩み寄る。日が射していたので頭がきらきらと光って、とても見苦しい。大路を埋めた者たちが、大勢集まって笑って大騒ぎをしている。車に乗った者、棧敷で見物している者たちが笑い騒ぐが、(元輔は)一つの車の方に歩み寄って言うことには、「君達は、この馬から落ちて冠を落としたことを、おろかだと思われるか。それは間違いである。それは、思慮^{しりょ}深い人でさえも、物につまづいて倒れる事は常にあることだ。まして馬は分別があるものではない。この大路はたいそう石が出てごつごつしている。馬は口を手綱^{たづな}で引つ張られているので、歩こうとしても歩けないのだ。ああ引きこう引きして、ぐるぐると引き回すから、倒れそうになるのだ。馬を悪いと思うべきではない。唐鞍は平べったく鐙には足のかけようがない。そのうえに、馬がひどくつまづいたので落ちたのだ。それはみつともないことではない。また冠が落ちたのは、ひもなどで結びつけておくものではなく、髪をよくかき入れて留められているものなのだ。それなのに髻がなくなっているの、まったくくない。それなら落ちることがあっても、冠を恨むべきではない。また例がないわけでもない。なに

がしの大臣は大嘗会の御禊で落とした。なにがしの中納言はその時の行幸で落とした。このように例も数え上げたらきりがない。だから、事情もご存じない近頃の若い君達は、お笑いなさるべきではない。お笑いなさることはおろかなことだ」と言って、車ごとに指を折って数えながら言い聞かせる。

このように言い終わって、「冠を持って来い」と言って受け取って頭を差し入れる。その時に、どつと声があがって限りなく大騒ぎして笑う。冠をかぶらせようとして、馬添が言うには、「落ちなさつてすぐ冠を召^めされずに、どうしてこのようにつまらない事をおつしやっていたのか」と尋ねると、「ばかなことを言うな。このように道理を言い聞かせたからこそ、この君達は後々にも笑わないだろう。そうでなければ、口さがない君達はいつまでも笑いの種にするだろうに」と言った。(元輔は)人を笑わせるようなことをよく言う人なのであった。

〔五〕 文法

問一 「どう」は直^後の「いつ」という動詞(用言)を修飾^{しゅうし}してお

り、活用がない自立語なので副詞である。

問二 動詞の活用の種類を見分けるには、打ち消しの助動詞「ない」に接続する未然形に着目する。(1)の「叱^ちろう」の「叱^ちろ」は、「叱^ちらない」のように「ない」にア段で接続するので、五段活用であ

設問にあわせて修正

後
設問にあわせて修正

る。また、五段活用で活用語尾が「叱ろ」と才段になるのは未然形だけなので、活用形も決まる。②の「いたかった」の「い」は、この形のまま「いない」のように「ない」にイ段で接続するので、上一段活用である。上一段活用では五段活用と異なり、活用語尾が未然形と連用形で同じ形なので、直前に何が来ているかで活用形を判断する必要がある。直前の「たかつ」は助動詞「たい」が活用したもので、「たい」に接続するのは連用形である。助動詞の接続にまではふみこまないのでください。

問三

「不意に」どうしたのかを考える。また、「いつのことだっただろうか、真冬の晴れ渡った空を、勤務していた会社の通用口のドアに手をかけようとしたときに不意に思い出したことがあった。」のように、「思い出した」の直前に「不意に」を移動させてみても元の文と意味が変わらないので、「思い出した」にかかることが確認できる。

問四

「信じられない」の「ない」は、「信じられぬ」「信じられず」のように言いかえられるので、助動詞の「ない」である。同じように言いかえられるエが正解。ア、イ、ウは形容詞の「ない」で、特にウは上の「小さく」と補助の関係になっているので補助形容詞である。また、才は「あぶない」という形容詞の一部である。

問五

一文節に、必ず自立語が一つ入るので、文節の数を数えれば、それが答えになる。この文は「来年に／なつたら／他県に／引越す／ことが／すでに／決まって／いた。」の八文節に分けられ

る。自立語は「来年（名詞）」「なつ（動詞）」「他県（名詞）」「引越す（動詞）」「こと（名詞）」「すでに（副詞）」「決まっ（動詞）」「い（動詞）」である。

トルツメ

トルツメ